

ネギのネギアザミウマに対する各種殺虫剤の殺虫効果の検討

1 情報・成果の内容

(1) 背景・目的

ネギアザミウマは、ネギを加害する主要な病害虫の一種であり、難防除の微小害虫である。本県では、過去に本種における薬剤感受性を評価しているが（竹内，2009）、近年は調査事例が存在しない。そこで、県西部白ネギほ場より採集したネギアザミウマを用いて各種薬剤の殺虫効果について検討した。

(2) 情報・成果の要約

1) 12 剤について供試した結果、下記の 5 剤は高い防除効果が見られた（表 1）。

表1 高い防除効果を示した剤の一覧

薬剤名(商品名)	倍率	IRAC
シベルメトリン乳剤（アグロスリン乳剤）	2,000倍	3 A
ニテンピラム水溶剤（ベストガード水溶剤）	1,000倍	4 A
チオシクラム水和剤（リーフガード顆粒水和剤）	1,500倍	14
フルキサメタミド乳剤（グレーシア乳剤）	2,000倍	30
フロメトキン水和剤（ファインセーブフロアブル）	1,000倍	34

2 試験成果の概要

- (1) 柴尾（2013）の方法に従って葉片浸漬法により試験を行った。
- (2) 供試虫は 2023 年に米子市和田地区、境港市渡地区ネギほ場より採集し、累代飼育した個体群を使用した。また、どちらの個体群も産雄単為生殖型であった。
- (3) シベルメトリン乳剤、ニテンピラム水溶剤、チオシクラム水和剤、フルキサメタミド乳剤、フロメトキン水和剤は両地区ともに補正死亡率 90%以上と高い防除効果が見られた（表 2）。

表2 ネギアザミウマに対する各種薬剤の殺虫効果（2025年）

薬剤名（商品名）	IRAC	希釈 倍率	供試 虫数	米子市和田		境港市渡	
				死虫率（％）		死虫率（％）	
				平均	補正 死亡率 （％）	平均	補正 死亡率 （％）
シベルメトリン乳剤（アグロスリン乳剤）	3A	2,000	30	96.7	96.4	100	100
ジノテフラン水溶剤（アルバリン顆粒水溶剤）	4A	2,000	30	83.3	82.1	76.7	75.0
ニテンピラム水溶剤（ベストガード水溶剤）	4A	1,000	30	100	100	100	100
スピネトラム水和剤（ディアナSC）	5	2,500	30	70.0	67.9	90.0	89.3
アバメクチン乳剤（アグリメック）	6	500	30	96.7	96.4	86.7	85.7
ピリフルキナゾン水和剤（コルト顆粒水和剤）	9B	2,000	30	36.7	32.1	90.0	89.3
チオシクラム水和剤（リーフガード顆粒水和）	14	1,500	30	93.3	92.9	100	100
スピロテトラマト水和剤（モベントフロアブル）	23	2,000	30	66.7	64.3	63.3	60.7
シアントラニリプロール水和剤（ベネビアOD）	28	2,000	30	56.7	53.6	90.0	89.3
フロニカミド顆粒水和剤（ウララDF）	29	1,000	30	63.3	60.7	60.0	57.1
フルキサメタミド乳剤（グレーシア乳剤）	30	2,000	30	100	100	100	100
フロメトキン水和剤（ファインセーブフロアブル）	34	1,000	30	100	100	100	100
無処理		-	30	6.7	-	6.7	-

補正死亡率 = (薬剤処理区の死虫率 - 対照区の死虫率) / (100 - 対照区の死虫率) × 100

3 利用上の留意点

- (1) 本試験は実験室内での試験結果であるため、実際には場で使用した際の防除効果と異なる可能性がある。
- (2) 本検定法は問題点として、脱皮害剤など幼虫に作用する薬剤、効果の発現が遅効的な薬剤、薬液の直接的な接触により殺虫効果が発現する薬剤の検定は難しい点が挙げられている（柴尾，2013）。

4 試験担当者

環境研究室	研究員	竹中	春人
	研究員	鈴木	祐 [*]
		[*] 退職	
	室長	米村	善栄 [*]
	[*] 現	園芸試験場	次長
	室長	北山	淑一